

# 古いヨーロッパ図書館学文献

折田 洋晴（立教大学兼任講師）

我が国でこれまで刊行されたヨーロッパの図書館史あるいは図書館学史を扱った本は、現代の欧米研究者の著した文献を使って書かれたものが多かったように思う。確かにかつては古いヨーロッパの図書館関係文献の入手は簡単ではなく、特定のテーマで博士論文を書くのでなければ、原典を探すほどの労力をかけられなかったかもしれない。すると、孫引きする文章となり、本質をとらえているか疑わしい場合もあるように思われる。ところが、今ではネット上で非常に多くの原典を読むことができる。それで、筆者はヨーロッパの古い図書館学文献をネットで探すことに夢中になった<sup>1)</sup>。本稿では、ネットで読める何点かの文献を紹介してみたい。

## 1. F. トレフラー『方法』（1560）

最初に具体的な図書館技術について書かれたとされる本はF. トレフラー『方法』<sup>2)</sup> (1560)で、バイエルン州立図書館（BSB）がデジタル化しており、インターネットで全文が読める。（[http://www.digitale-sammlungen.de/index.html?c=digitale\\_sammlungen&l=de](http://www.digitale-sammlungen.de/index.html?c=digitale_sammlungen&l=de)）本文はラテン語、八折（8vo）で200ページほどの分量で、その長いタイトルを直訳すると「異なった種類の索引と分類によって、どんな種類の書物についても、どんな図書館でも、すばやく、容易に、繰り返し行なえる整理の方法。それにより、学者は非常に快適に、長い調査を行なうことなく、求める書物を見つけ、読むことができる」である。著者 Florian Treffer (1483-1565) はバイエルンのベネディクト会修道士であるが、ドイツの伝記辞典にも記載がなく、詳細は不明の人物である<sup>3)</sup>。また、この本は異版がなく、18-19世紀には稀覯書として知られていた<sup>4)</sup>。2011年にはファクシミリ版が刊行され<sup>5)</sup>、それにはイタリア語訳が付けられているので、それを使って内容を紹介してみる。

トレフラーは8世紀に建てられた Benediktbeuern 修道院の司書でもあったので、恐らく本書は彼の実践を書いたものであろう<sup>6)</sup>。図書館の蔵書を簡単に探せる方法として6種類の索引（index）を作成することを勧めている。しかし、これは本文に対する索引ではなく、6種類の目録を作成することに近い。Primus index と呼ばれるものは著者目録で、「どのような著者の、そして同じ著者のどのような文書が図書館に蔵されているかを表わし、配架場所が見つかるようにした」目録である。目録記入は以下のように、著者名から書き始め、タイトル等の後にアルファベットの太文字3個が記されている。

Aelianus de varia historia, graecè & latinè. vide exempla vitiorum & virtutum.  
M.A.I.

この目録記入を補足して説明すると、Claudius Aelianus という著者の *De varia historia* というギリシア語・ラテン語の著作が *Exempla virtutum et vitiorum...* (Basel, 1555) という本に含まれており、その本は中型本、白い革の製本で神学者の場所に配架されていることを示している。アイリアノス『ギリシア奇譚集』が神学者に分類されているのは奇異であるが、*Exempla virtutum et vitiorum...* に含まれている最初の著作である Nicolas de Hanapes の *Virtutum et vitiorum exempla* (『徳と悪の範例』) に対する分類によるものである。上記の vide は「を見よ」という意味で、アイリアノスが分出記入であることを示している。最後の配架記号の最初の文字は判型（I が大型、M が中型、P が小型）を表わし、2番目の文字は製本の革の色（A が白、R が赤、N が黒）を表わしている。最

後の文字は分類を表わしているが、これについては次の分類目録のところで述べる。この目録は著者のアルファベット順に排列される。

Secundus index と呼ばれるのは分類目録で、A から R までの 17 文字で 16 の主題が分類される。A はローマ法、B は教会法、C は大系、全書（スンマ）、D は命題集、E は書誌・辞書、F,G は聖人伝・年代記・地誌、H は神学、I は神学者、K は論争家、L は哲学、M は演説家・弁論家、N は書簡文、O は詩、P は文献学、Q はその他、R はドイツ語文献 となっており、トレフラーは本書で各分類に入る著者・著作の例示を行なっている。分類体系は主題より形式を重視しているように思われるが、トレフラーの図書館ではその方が使いやすかったのかもしれない。そして、さらに細かな主題から検索できるようにしたのが次の目録である。

Tertius index と呼ばれるのがロキ・コムーネス<sup>7)</sup>の目録である。これはコンラート・ゲスナー (1516-1565) の『総覧 (Pandectarum)』(1548)<sup>8)</sup> という書誌の影響を受けている。『総覧』はゲスナーが 1545 年に刊行した『万有文庫 (Bibliotheca universalis)』の第 2 巻として刊行された分類順の書誌で、さらに続巻として件名のアルファベット順書誌も予定されていたが、こちらは刊行されなかった。著者名・分類・件名という異なる観点から検索する技術は、ゲスナーの師であるコンラート・ペリカン (1478-1556) が 1532 年から作成していたグロスミュンスター修道院図書館の蔵書目録<sup>9)</sup>で行なわれていたものである。ゲスナーの『万有文庫』や『総覧』はチューリッヒ中央図書館 (ZBZ) がデジタル化しており、インターネットで全文が読める。(http://www.zb.uzh.ch/)『総覧』の分類体系<sup>10)</sup>はペリカンの分類体系<sup>11)</sup>をほとんど踏襲しており、大分類の筆頭「Liber I: 文法」の下にある Titulus と呼ばれる 21 の下位分類中の 13 番目「Varijs (その他)」に分類・件名についての記述が含まれている。この「その他」は pars 1 から 8 までに分かれ、pars 2 では図書の索引の例が述べられ、ペリカンが 1537 年に刊行した聖書の索引 *Index Bibliorum* やヴァティカン図書館などで作られた索引などが言及されている。pars 4 は De loci communibus と題してロキ・コムーネスが説明されており、pars 5: De ratione colligendi locos communes (ロキ・コムーネスの集合体系) では普遍的なロキ・コムーネスとして、聖書、法律、神、信仰、人間、被造物、キリスト、教会、秘蹟、司法、学芸、徳と悪徳 という 12 の一般的ロキの下に 950 のロキ・コムーネスの一覧を提示している。トレフラーは本書でこの一覧をそのまま掲載して範例とした (同書 K7<sup>r</sup>-N2<sup>v</sup>) が、実践としてどのような件名目録を作成したかは不明である。ちなみにペリカンの目録では Absolutio から Uxor まで約 400 の件名標目の下で目録が記述されており<sup>12)</sup>、ゲスナーの『総覧神学篇 (Partitiones theologicae)』<sup>13)</sup> (1549) 巻末にある総覧全体に対する件名索引 (Index communis in libros XX) には Abacus Graecus から Zonae mundi まで約 4,000 の件名に対する総覧本文の該当ページが記載されている。

トレフラーのロキ・コムーネス目録は分類体系別にロキ・コムーネスを配列するとしており、さらに彼はロキ・コムーネスのアルファベット順索引を Quartus index と呼んでいるが、これは Tertius index へのアルファベット順索引として構想されている。

Quintus index と呼ばれるのは「役に立たない、あるいは不要な本の目録」であるが、それを決めるのは難しい問題なので、該当しそうな本を別置するための目録である。トレフラーによれば「図書館の価値は良質で役に立つ図書を配備しているところにあり」、この目録を用意するのは図書館の質を保つためである。

Sextus index と呼ばれるのは貸出管理のための帳簿で、修道院図書館の場合、修道僧の名前の下に借り出している資料を記載する。亡失の管理にも利用する。

本書の内容のうち、我々になじみの少ないのが Tertius index と呼ばれるロキ・コムネスの目録、言い換えると件名目録のことであろう。今日でも件名目録は一番標準化が遅れているように思われるが、それだけさまざまな試行錯誤が行なわれてきている<sup>14)</sup>。以下では他の件名目録について書いてみよう。

## 2. 他の件名目録

ここでは、ネットで読める古い件名目録のいくつかを紹介してみる。1565年に設立されたローマのオラトリア会図書館 Biblioteca Vallicelliana の司書 Fabiano Giustiniani (1578-1627) が同館の蔵書を使って作成した *Index universalis alphabeticus*<sup>15)</sup> (1612) は、フォリオ版で目録本文 565p、付録 71p、著者一覧 93p からなる大著で、Google Books ([http://books.google.com/advanced\\_book\\_search](http://books.google.com/advanced_book_search)) で全文が読める。

この *Index* は、5万点の著作について 4,500 件の件名を付与した目録で、各件名は細目に分かれており、細目を含めると総数は 16,000 件にのぼる。件名の下に、その主題を持つ図書の著者・書名が簡潔に記載されており、図書館でその図書を利用するには、改めて蔵書目録を検索することになる。その意味で本書は主題書誌であるが、ヴァリチェリアーナ図書館の蔵書はキリスト教関係のものに偏っており、分野により密度の違いがある。件名はゲスナーの『総覧神学篇』巻末の件名索引に使われたものに似ており、alchimia, astronomia のような普通名詞、Aaron, Abel のような人名、Africa, Iaponens のような地名などがあり、配列はアルファベット順である。また、件名は図書全体に付けられているのではなく、その主題について部分的に記述のある本も対象としており、T. Garzoni の *La piazza universale di tutte le professioni del mondo*<sup>16)</sup> のような百科全書的な著作を案内する件名も多い。ジュスティニアーニは本書刊行後も増補の作業を続けており、1627年の日付のある第2版の原稿が没後に遺され、現在はミラノの Biblioteca Nazionale Braidense が Ms AE XII. 17 という番号で所蔵している<sup>17)</sup>。

その約半世紀後にフィレンツェ生まれの愛書家 Francesco Marucelli (1625-1703) はローマで幅広い本の収集を始め、集めた 6,000 冊のコレクションの目録を自ら作成した。それは *Mare magnum omnium materiarum, sive Index universalis alphabeticus...* と題され、1701年の刊記のあるタイトル・ページの見本刷が残されているが、刊行には至らなかった。タイトルから分かるように、ジュスティニアーニと同じ件名目録で、百科全書的な書誌の役割を果たす包括的なコレクションとなっていた。彼には、特に貧しい人たちに開かれた図書館を作るという目的があり、没後、このコレクションはフィレンツェに運ばれ、甥の Alessandro Marucelli (1672-1751) が管理した。甥はさらに収集を続けるとともに、目録を 24 巻まで拡張した。そして、このコレクションは 1752 年に Biblioteca Marucelliana として公開され、館の入り口には Marucellorum Bibliotheca publice maxime pauperum utilitati という標語が掲げられた。

この図書館の司書 Angelo Maria Bandini<sup>18)</sup> (1726-1803) はさらに蔵書を増やし、この目録を 111 巻に作り変えた。現存しているのはこの写本のみで、Ms ACB.IX.1 ~ 111 という番号が与えられている。本書はマルチェリアーナ図書館がデジタル化しており、インターネットで閲覧できる。(<http://www.maru.firenze.sbn.it/MareMagnum/>) トレフラーの Tertius index のように、分類毎に件名がアルファベット順に配列されており、分類項目は Biblia sacra (v.1-4)、Liturgia (v.5-10)、Theologia universalis (v.11-21) ... Mathematica (v.69-71) ... Asia (v.88-89) ... Lustiana, America et varia (v.111) など全部で 42 からなっている。件名は総数が 5,000 を越えるが、どの巻に含まれているかは



すぐには分からないようになっている。そこで、1888年に当時マルチェリアーナ図書館長であった Guido Biagi (1855-1925) が各巻に含まれる件名の一覧と各件名がどの巻に含まれるかを示す索引を刊行した<sup>19)</sup>。これを使うと Japonia という件名は第 88 巻にあることが分かる。Internat culturale (<http://www.internetculturale.it/opencms/opencms/it/>) でも本書を読むことができ、こちらでは件名から検索できる。Japonia で検索してみると 150<sup>r</sup>-161<sup>r</sup> まで 12 葉（裏面は白紙）が日本に関する本で、60 点以上の記載があることが分かる。

F. マルチェリと同じころ、フランスの Adrien Baillet (1649-1706) も件名目録を作っていた。高等法院長であった父 Guillaume de Lamoignon (1617-1677) の蔵書を引き継いだ息子 Chrétien-François de Lamoignon (1644-1709) に雇われ、1680 年に彼の文庫の司書となって蔵書の整理を任されたのである。バイエは 35 巻の目録を作成したと言われるが、1871 年のパリ・コミューンで焼失し、現存しない。しかし、バイエはこの目録について自著 *Jugemens des savans sur les principaux ouvrages des auteurs les plus connus* (1685-86) の Tom.2, 1. pt. の中に In priorem Bibliothecae Lamonianae indicem praefatio という上記目録の序文を掲載した。彼は各種の目録・書誌類によく目を通し、どういう目録を作るべきかを考えていたのである。バイエの *Jugemens des savans* は良書の判断基準を明らかにする目的で各著者の著作を論評した膨大な著作であるが、Tom. 2, 1<sup>e</sup> pt. は Critiques historiques と題され、おおまかに言えば目録・書誌類を論評している。第 6 章の Jacques de Thou の蔵書目録を論評する項目で、いろいろな目録・索引法の長所・短所を述べながら、自らの考えはラモアニオン目録の序文に記したので、巻末に付するとして、In priorem Bibliothecae Lamonianae indicem praefatio が付されているわけである<sup>20)</sup>。*Jugemens des savans* は初版、第 2 版とも Google Books で全文が読め、第 2 版は Gallica (<http://gallica.bnf.fr/>) でも全文が読める。

バイエの目録自体は失われているので、その詳細は確認できないが、ラモアニオンの蔵書目録は 18 世紀末に何度か刊行されており<sup>21)</sup>、それらからバイエが作った目録の内容が想像される。蔵書は大きく Théologie、Jurisprudence、Sciences et Arts、Belles-lettres、Histoire に分けて配架されており、それぞれがさらに細かく分類されて配架されていたので、まず分類目録が作られていただろう。そして、著者索引は著者＋書名の形で作られ、別に細かな件名目録が作られていたと思われる。目録序文では、各種の目録・書誌類を概括した後、17 点にわたって自分の目録の考え方を説明している<sup>22)</sup>。今日の言葉で言うと、件名の時代区分・地理区分に関することや分出記入法、地名・人名の標目形、参照法、Ij や u,v などの綴りの表記法等々が実例を挙げて書かれており、非常に興味深い。

件名目録はその後も様々なものが試みられた。ドイツ語では件名目録を Real-Katalog というが、これに精力を傾けたのが Martin Schrettinger (1772-1851) であった。彼は自著 *Versuch eines vollständigen Lehrbuch der Bibliothek-Wissenschaft* (1829) で件名目録について詳述している<sup>23)</sup> が、1819 年から自分でも件名目録の作成を行っていた。人類学、人類史、技術、バイエルン、体育、総合哲学の分野の件名目録が作られたが、他の分野は完成せず、刊行もされなかったという<sup>24)</sup>。このように、件名目録は作るのが最も困難な目録であった。以下では、ネットで閲覧できる古い図書館目録のいくつかを見ておこう。

### 3. 古い図書館目録

印刷された最も古い図書館目録とされるのは 1595 年に刊行されたライデン大学図書館の蔵書目録である。新館開館を期して刊行されたこの目録を作成したのは Petrus Bertius

(1565-1629) という当時、神学部の副学寮長を務めていた人物で、後に地図作成で有名になる。タイトルは *Nomenclator* となっているが、当時、図書目録は *catalogus* 以外にも *bibliotheca*、*elenchus*、*index* とともに *nomenclator*<sup>25)</sup> と呼ばれていた。この目録は書架目録で *Theologi*、*Jurisperiti*、*Medici*、*Historici*、*Philosophi*、*Mathematici*、*Literatores* に分かれた配架順の一覧となっている。四折 (4vo) で 100 ページほどの小冊子で、ライデン大学図書館がデジタル化し、ファクシミリ版を刊行するとともに、インターネットで公開している。[\(http://bc.ub.leidenuniv.nl/bc/nomenclator/\)](http://bc.ub.leidenuniv.nl/bc/nomenclator/) 原書には著者索引がないが、このサイトでは著者索引が作られ、本文へのリンクが張られている。これにより、ゲスナーの『万有文庫』や『総覧』が所蔵されていたことが簡単に確かめられる。

印刷された図書館目録として有名なのはオックスフォード大学の目録で、1605 年に刊行されたボードリアン図書館蔵書目録は以後の目録の手本になったともいわれる。1986 年にファクシミリ版が刊行されていたが、今では Google Books で読める。実は、以下のボードリアン図書館目録がすべて Google Books で読めるようになっている。Thomas James (c.1573-1629) 編纂の *Catalogus librorum Bibliothecae publicae quam vir ornatissimus Thomas Bodleius...* (Oxford, 1605)、及び *Catalogus universalis librorum in Bibliotheca Bodleiana...* (Oxford, 1620)、Thomas Hyde (1636-1703) 編纂の *Catalogus impressorum librorum Bibliothecae Bodleianae in Academia Oxoniensi* (Oxford, 1674) [これは序文に簡単な目録規則が書かれていることで有名]、トーマス・ハイドが改訂を始め、J. Bowles, R. Fysher, E. Langford らにより編纂された *Catalogus impressorum librorum Bibliothecae Bodleianae in Academia Oxoniensi* (Oxford, 1738) 2 v.。また、トーマス・ジェームズは件名目録を 3 種類用意していたが、刊行はされなかった<sup>26)</sup>。

これら以外に多くの図書館目録が作成されてきたわけであるが、当時の目録作成の規範はどうなっていたのであろうか。ドイツの図書館学者 Friedrich Adolf Ebert (1791-1834) は司書の教養を述べた *Die Bildung des Bibliothekars* (1820) の中で、「初心者には、さしあたってこれらの教科書は避け、すぐれた目録の整理技術を学ぶことに専念すべきである。」<sup>27)</sup> として、Johann Michael Francke (1717-1775) の *Catalogus Bibliothecae Bunavianae* (Leipzig, 1750-56) と Giovanni Battista Audiffredi (1714-1794) の *Bibliothecae Casanatensis catalogus librorum typis impressorum* (Roma, 1761-1788) の二つをよく調べるように言っている。前者はビューナウ伯爵 (1665-1745) の蔵書目録で、蔵書は 1764 年にザクセン王立図書館の所蔵となった。この目録は分類体系のすばらしさで賞賛され、Herzogin Anna Amaria Bibliothek の Monographien Digital というサイトで全文が読める。[http://ora-web.klassik-stiftung.de/digimo\\_online/digimo.entry](http://ora-web.klassik-stiftung.de/digimo_online/digimo.entry) 後者は、カサナーテ枢機卿 (1620-1700) の蔵書を基に、1701 年に設立されたローマのカサナテンセ図書館の蔵書目録で、第 4 巻までしか刊行されなかったにもかかわらず、その書誌記述のすばらしさで賞賛され、イタリアの Istituto Centrale per il Catalogo Unico (ICCU) のサイト *Cataloghi storici digitalizzati* (<http://cataloghistorici.bdi.sbn.it/>) で全文が読める。このサイトは他にも多数のイタリアの古い図書館目録が公開されている。

#### 4. J. ペル『数学のアイデア』(1638)

最後に、John Pell (1611-1685) の数学図書館論について紹介する。ジョン・ペルはペル方程式<sup>28)</sup> に名を残す数学者であるが、この方程式をペルは研究していないという。間違われたのはそれなりの理由があるだろうが、彼は著作こそ少ないが、大量の草稿類を遺し、現在は British Library が所蔵している。まだ若かった 1638 年に Samuel Hartlib (c.1600-

1662)<sup>29)</sup> 宛ての書簡として *An idea of mathematicks* という数学図書館論を書いた<sup>30)</sup>。これは著者名もタイトルもなしで一枚物として印刷され (両面 2 p.)、ハートリブはこれをラテン語訳してヨーロッパ中の友人に送ったという。また、1650 年には John Dury *The reformed librarie-keeper* (London, 1650)<sup>31)</sup> の中に収録され、翌 1651 年に出版された合本 *The reformed-school and The reformed librarie-keeper* (1651) の中にも収録された。しかし、これらはネットで公開されてはおらず、有料のデータベース Early English Books Online (EEBO) (<http://eebo.chadwyck.com/home>) で全文が読める。ラテン語訳は Robert Hooke の雑誌 *Philosophical collections* (London, 1679-82) に収録され<sup>32)</sup>、こちらは Google Books で読める。

この書簡でペルが述べているのは、以下のようなことである。数学は研究への意思・理解・方法・楽しみを欲するという範囲内では大きな進歩の達成がなくても不思議ではないが、研究の利益、研究への助けと方法を明らかにすれば、進歩が可能である。そのため、(1) Consiliarius mathematicus という、これまでの数学の状況や方向性がわかる道具を作る。それは、既刊・未刊を問わず公共図書館にある全数学著作の梗概、全数学者の時代順一覧とその著作の初出年のわかる目録、各著作のタイトル・判型・ページ数・異版がわかり、その梗概へ辿りつける目録などを作ること、学生に良書を教える助言者を用意すること、研究の評価ができる人物が指導できるようにすることなどである。(2) 国外で刊行されたものも含め、すべての数学著作を所蔵する公共図書館を作り、適切な選書や国外の図書館との交信、目録作成のできる図書館員を置く。(3) 数学全体の到達状況・命題とその発見者などのわかる総覧 (*Pandectae mathematicae*) やポケットサイズの数表 (*Comes mathematicus*)、そして問題の解決に向かうアルゴリズムの集成 (*Mathematicus aytarkes*) を刊行する。等々。

こうした提案は 20 世紀に科学技術関係の抄録誌・情報センターなどが作られたエートスと変わらない気がする。このアイデアはベーコンの『ニュー・アトランティス』に見られるユートピア思想が反映しており、図書館は「サロモンの家」のひとつの施設であるという考えが窺われる。イギリスで王立協会が設立されたのは 1660 年のことであった。しかし、ユートピア<sup>33)</sup> とは無味のねだりの意味にもなりかねず、ペルは自分のアイデアを実現しようと努力をしたが、どれも達成されなかったという。ちなみに数学書誌としては、Cornelius à Beughem *Bibliographia mathematica et artificiosa novissima perpetuò continuanda...* (Amsteldam, 1688) や F. W. A. Murhard *Litteratur der mathematischen Wissenschaften* (Leipzig, 1797-1805) 5 v. などが Google Books で読める。

## おわりに

以上、ネットで読めるいくつかの図書館学文献を紹介してきたが、これらはネットの検索窓口から次々と見つけたわけではない。種本としてイタリアの図書館学者 Alfredo Serrai (1932- ) の著書<sup>34)</sup> を使って、それがネットで読めるかを調べた結果である。A. セライは実に多くの本に目を通しており、頭が下がる。現在、ネットで読める文献は非常に多く、孫引きをしないで済むようになることはありがたいが、ページを繰るのに時間ばかりかかり、原本を触るような読み方にならないのは残念だ。本稿は、ピエール・バイヤール『読んでいない本について堂々と語る方法』<sup>35)</sup> という本を読みながら書かれたことも報告しておく。

<sup>1)</sup> 筆者は「インキュナブラ」という言葉が最初に使われたのは B. von Mallinckrodt (1591-1664)



の *De ortu ac progressu* (Köln, 1640) という本においてであったとかつて孫引きで書いた。当時、その本の入手を試みるも、かなわなかった。その後、同書が J. C. Wolf (1683-1739) 編集の *Monumenta typographica* (Hamburg, 1740) という本に翻刻されていることを知り、こちらは入手することができ、全ページをめくって使われた箇所が複数あることが確認できた時は嬉しかった。ところが、今ではどちらの本も Google Books で全文を読むことができ、その箇所も簡単に検索できる。

- 2) Trefler, Florian. *Methodus exhibens per varios indices, et classes subinde, quorumlibet librorum, cuiuslibet bibliothecae, brevem, facilem, imitabilem ordinationem. Qua fane peraccommode, & sine multa inquisition occurrat studiosis optata inventio, & lectio eorundem.* Augustae, Philippum Ulhardum, [1560].
- 3) Hemmerle, Josef. *Die Benediktinerabtei Benediktbeuern.* Berlin, De Gruyter, 1996, p.599-600. に略歴がある。
- 4) 我が国では慶應義塾図書館で貴重書として所蔵されている。
- 5) Trefler, F. *Methodus...* Tradotta e cura da Federico Olmi. Sala Bolognese, A. Forni, 2011.
- 6) 本書 6<sup>r</sup>8<sup>v</sup> に付けられた当時の修道院長 Ludwig Pörtl 宛の献辞によれば、本書は図書館の新館建設をきっかけに執筆されたようである。ベネディクトボイエレン修道院の年代記 Meichelbeck, C. *Chronicon Benedictoburanum* T. 1 (1751) の 1565 年の記事にトレフラーの死去が記されている (p.249-250) が、その中で図書館の新館建設や『方法』について言及されている。
- 7) loci communes とはアリストテレスの『トピカ』で扱われるトpos (場所) のラテン語形で、重要な推論技術として中世以降も使われた。ルネサンス時代には P. メランヒトンの『ロキ・コムーネス』(1521) がプロテスタント神学の体系化に貢献し、loci communes をタイトルに含む多数の著作がなされた。論題をトピックというのはトpos から来ており、ロキ・コムーネスの英語形 commonplace は膨大な文献から必要なものを引き出せる忘備録の意味にもなった。
- 8) Gesner, C. *Pandectarum, sive Partitionum universalium Conradi Gesneri Tigurini...* Tiguri, C. Froschoverus, 1548.
- 9) このペリカン自筆の目録は現在 Ms. Car. XII 4 という番号で、Zentralbibliothek Zürich で所蔵されているが、デジタル画像は公開されていない。標題は *Inventarium et Elenchus librorum Bibliothecae Collegii Maioris Ecclesiae Tigurinae. Ad annum MDXXXII* とあり、全 347 葉の写本である。この目録については Germann, Martin. *Die reformierte Stiftsbibliothek am Grossmünster Zürich in 16. Jahrhundert und die Anfänge der neuzeitlichen Bibliographie.* Wiesbaden, Harrassowitz, 1994. を参照。
- 10) 文法、弁証法、修辞学、詩学、算術、幾何学、音楽、天文学、占星術、予言・魔術、地理学、歴史、力学等の技艺、自然哲学、第一哲学 (形而上学)、道德哲学、経済哲学、政治学、市民法・教会法、医学、キリスト教神学の 21 分類。
- 11) 文法、論理学、修辞学、算術、幾何学、音楽、天文学、聖書神学、スコラ学、異端、哲学、自然学、医学、道德、市民法、教会法、弁論術、歴史、詩学、地理学、迷信の 21 分類。
- 12) ペリカン目録の pp.373-611 が件名目録であり、その標題は Loci communes となっている。
- 13) Gesner, Conrad. *Partitiones theologicae, Pandectarum universalium Conradi Gesneri liber ultimus...* Tiguri, C. Froschoverus, 1549.
- 14) Taylor, Archer. *General subject-indexes since 1548.* Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1966. 及び Fumagalli, Giuseppe. *Cataloghi di biblioteche e indici bibliografici.* Firenze, Sansoni, 1887, pt.4: Del catalogo reale p.177-199. を参照。
- 15) Justinianus, Fabianus. *Index universalis alphabeticus; materias in omni facultate consulto pertractatas...* Romae, Typographia Reverendae Camerae Apostolicae, 1612.

- <sup>16)</sup> 1585 年が初版の世界職業事典。版を重ねたし、独・西・羅語に訳されて、良く使われた。
- <sup>17)</sup> イタリアのオンライン写本目録 Manus (<http://manus.iccu.sbn.it/>) によると、第 1 葉表にあるタイトルは *Bibliotheca sive Index universalis alphabeticus [...] Fabiani Iustiniani Genuensis [...] Episcopi Adiacensis editio secunda Auctore ipso recensente in meliorem formam redacta atque in duplum aucta [...]* とあり、全 968 葉、サイズは 290 x 210 mm という。また、このマイクロフィルムはシカゴの Newberry Library が所蔵している。
- <sup>18)</sup> A. M. バンディーニは後にラウレンツィアーナ図書館長も務めた。マルチェリアーナ図書館も含めた当時のフィレンツェの図書館活動については Chapron, Emmanuel. «*Ad utilità pubblica*» ; *politique des bibliothèques et pratiques du livre à Florence au XVIII<sup>e</sup> siècle*. Genève, Droz, 2009. を参照。
- <sup>19)</sup> Biagi Guido ed. *Indice del Mare magnum di Francesco Marucelli*. Roma, 1888. 序文として F. マルチェリの業績が書かれており、本書は Google Books で全文が読める。
- <sup>20)</sup> 初版 (1685-86) では T.1, 1<sup>e</sup> pt. p.329 の後に、第 2 版 (1722) では T. 1 の p.61-81[i.e.71] (h3<sup>f</sup>-i4<sup>r</sup>) にある。
- <sup>21)</sup> ラモワニオン蔵書は 18 世紀末には Chrétien François de Lamoignon de Bâville(1735-1789) が受け継いでおり、1770 年には *Catalogue des livres imprimés et manuscrits de la Bibliothèque de M. de Lamoignon, President du Parlement*、1791-92 年には *Catalogue des livres de la Bibliothèque de feu M. de Lamoignon, Garde des Sceaux de France* という目録が刊行されている。前者は Gallica で、後者は Google Books で全文が読める。後者は一括の売立を目的に刊行された。
- <sup>22)</sup> Verner, Mathilde. “Adrien Baillet (1649-1706) and his rules for an alphabetic catalog,” *Library Quarterly*, Vol. 38, 1968, p.217-230. を参照。
- <sup>23)</sup> Schrettinger, Martin. *Versuch eines vollständigen Lehrbuch der Bibliothek-Wissenschaft*. München: J. Lindauer, 1829, Bd.2, p.121-160.
- <sup>24)</sup> 河井弘志『マルティン・シュレツティング』日良居タイムス, 2012, p.169-172. を参照。
- <sup>25)</sup> 当時、Nomenclator というタイトルで Constantin, Robert *Nomenclator insignium scriptorium...* Pari, 1555. という良書一覧や Spach, Israel. *Nomenclator scriptorium medicorum*. Frankfurt, 1590. という医学書誌が刊行されていた。
- <sup>26)</sup> Wheeler. G. W. *The earliest catalogues of the Bodleian Library* (Oxford. Univesity Press, 1928. p.94-116 及び Sears. Jane. *Library catalogues of the English Renaissance*. Godalming, St Paul's Bibliographies, 1983, p.69, 71-72 を参照。
- <sup>27)</sup> F. A. エーベルト「司書の自己修練」三宅悟・河井弘志訳、河井弘志編訳『司書の教養』京都大学図書館情報学研究会, 2004, p.16. を参照。
- <sup>28)</sup> d を二乗数でない自然数として  $x^2 - dy^2 = 1$  という形の不定方程式はペル方程式と呼ばれ、19 世紀になって必ず自然数解が存在することが証明された。例えば d=13 の場合、x=649, y=180 が解である。d=61 の場合、解は 9-10 桁の数となる。
- <sup>29)</sup> S. ハートリブは J. Dury, J. A. Commenius と並ぶベーコン主義者で、知識の普及や教育に尽力した。
- <sup>30)</sup> Van Maanen, Jan. “John Pell (1611-1685); mathematical utopian,” *Metascience*, Vol. 15, 2006, p.217-249. を参照。
- <sup>31)</sup> ジョン・デュリー (1596-1680) のこの図書館論は有名で、何度も再版されている。Project Gutenberg (<http://www.gutenberg.org/>) では、1983 年に刊行されたテキストを公開しているが、ペルのテキストは収録されていない。
- <sup>32)</sup> Hooke, Robert. *Philosophical collections* の p.127-134 に Idea mathesecos Joannis Pellii S. Th. D. perscripta ad S. H. というタイトルで掲載されている。*Philosophical collections* は



No.1 (1679) から No.7 (Apr.1682) まで刊行された逐次刊行物で、*Philosophical transactions of the Royal Society of London* が中断している時に、代わりに刊行された。no.2 からは通しページが振られ、p.123-162 が No.5 (Feb.1682) に当たる。Google Books は全 1 冊に製本されたものの画像である。

<sup>33)</sup> ユートピアとはどこにもない場所という意味。

<sup>34)</sup> A. Serrai は非常に多作の人であるが、ローマの Bulzoni 書店から *Storia della bibliografia* という大部の本を全 11 巻で刊行している。また、2005 年には Fiammeta Sabba と共著で *Profilo di Storia della bibliografia* という簡略版をミラノの Sylvestre Bonnard から出版している。

<sup>35)</sup> Bayard, Pierre 『読んでいない本を堂々と語る方法』 [*Comment parler des livres que l'on n'a pas lus?*] 大浦康介訳, 筑摩書房, 2008. 原書は 2007 年刊で英訳 *How to talk about books you haven't read* も 2007 年に出た。